慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	授業過程の教授学的研究 : 外国語教授法における伝統的欠陥克服の試み
Sub Title	
Author	五十嵐, 二郎(Igarashi, Jiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1978
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.18 (1978.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000018-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学事報告

学位授与者氏名および論文題目

修　士（昭和 51 年 3 月）

社会学修士

第 331 号　青木　和博　家族の新しいタイプ―ニューファミリーの意識と行動パターン―

第 332 号　福島　邦夫　巫女―遊行宗教芸能者と村落社会―

第 333 号　桂　　啓壮　科学の社会学に関する一考察

第 334 号　森　　陽子　現代日本の女性と家庭

第 335 号　二藤　導夫　理念型的方法の批判的考察

第 336 号　野元真理子　態度変容と行動変容

第 337 号　大宮　　登　ウェーバーにおける「文化人」

第 338 号　島津　英世　過疎地域の開発が地域の自然・社会環境に及ぼす影響について

第 339 号　龍野　裕通　コミュニケーション科学の観点から見た宗教の研究

第 340 号　内田　康雄　フィリピン出生力因の研究―医療社会学的試論―

第 341 号　柳本由起夫　服従の了解―意識と宣伝―

心理学修士

第 342 号　鬘櫛　一夫　立体視成立のメカニズム

第 343 号　深澤　伸幸　色覚に随伴した運動残効―凝視条件下での検討―

第 344 号　伊田　政司　The Operation of Subjective Summation

第 345 号　小山　令子　Single Schedule, Concurrent Schedules における elimination の効果について

第 346 号　鈴木　恒男　マッカロー効果の情報論的研究―マッカロー効果における情報検索のシステムに関する検討―

第 347 号　渡辺　昭彦　デンショバトに於ける計数行動の研究

教育学修士

第 348 号　箕口　雅博　判断事態における手がかりの用い方に関する数量的研究―教師の行なう価値的判断事態への適用―

第 349 号　中村　圭吾　Time Perspective に関する研究―青年期を中心とした発達心理学的考察―

第 350 号　中山　　治　精薄児・自閉児の早期学習訓練

第 351 号　大江正比古　高学歴社会における高等教育―コミュニティ・ジュニア・カレッジに関する一考察―

第 352 号　李　　仁徳　日中義務教育の比較研究

第 353 号　諏訪内敬司　ソクラテスにおける教育の理論

第 354 号　上北　　彰　認識の構造―イメージとことばと―

博　士（乙）

教育学博士

第 715 号　五十嵐　二　郎　　昭和52年 9 月22日

〔論文審査担当者〕

主　査　慶応義塾大学　文学部教授
同　大学院
社会学研究科委員　村　井　　実

副　査　慶応義塾大学　文学部教授
同　大学院
社会学研究科委員　斎藤幸一郎

副　査　広島大学名誉教授　佐　藤　正　夫

〔学力確認担当者〕

慶応義塾大学文学部教授　中　田　美　喜

〔論文審査の要旨〕

授業過程の教授学的研究

―外国語教授法における伝統的欠陥克服の試み―

どの教科にあっても，教授法の問題，特に授業の進め方の手続きを如何にすべきかの問題は，現場における教育の成否を決定する最も具体的かつ直接的なキイ・ポイ

ントとも言えるものであるにもかかわらず，それについてのいわゆる教授学的研究は，理論と実践との間の重なりの部分の研究であるために，必らずしも十分な成果が得られていず，その結果，これまでのところ，この種の問題は，多くの場合各教科担当の各教師の常識的もしくは直観的な個人的判断に任かされてきた傾向がある。この傾向は，英語の教授法の場合も例外ではない。

本論文の筆者五十嵐二郎氏は，かつて，中学校の教師であった約27年前当時から抱きつづけてきた英語教授法についてのそうした疑問に発し，この種の問題を解決すべく，実践的にも理論的にも一貫してたゆまぬ努力を傾けてきたのであったが，このたび，いわば，そうした長年の努力の結晶ともいうべき成果を，表題のような論文にまとめるに至ったものである。

五十嵐氏が長年にわたって疑問とし，本論文においてようやくそれに対して満足すべき解答を見出すことのできた中心的な問題は2つある。

そのひとつは，特に中学校における英語の集団授業の場において，英語を用いての教師と生徒との間でのいわゆる問答法が採用される場合の問の仕方に関するものである。すなわち，従来ほとんど大多数の授業の場で採用されてきており，また，たとえば，P. Gurrey が彼の著書で積極的に主張している問の仕方は混合型である。つまり，Simple Question (生徒に対し Yes もしくは No の形式の答を求めるような YN-A または YN-N 型の質問) と，Alternative Question (生徒に対し A もしくは B のどちらか一方を選んで応答させるような Alt 型の質問) と，Special Question (What とか Where といった問い方による Wh 型の質問) との，これら3つの型の質問がアト・ランダムの順序で混合してあたえられるような問の仕方である。五十嵐氏は，このような従来の問の仕方に対し，集団授業を効率よく行なうに必要な要件に関する種々な角度からの理論的な考察，F. L. Bumpass が示している教授学的な理論的な根拠，ならびに五十嵐氏自身の豊富な実践経験により具体例等を総合して，教師による問いは，一定の順序にしたがってなされるべきであるという仮説に到達した。すなわち，教師からの問いは，各教材単位ごとに，はじめに Simple Question，つぎに，Alternative Question，そして最後の段階で Special Question という順序で行なうべきである，というのがその仮説である。

この仮説は，第1実験および第2実験によって検証が試みられている。すなわち，第1実験では，被験者としての生徒たちの応答の正答率の上から，上述の順序で後者の場合ほど困難度が増大することが示されており，第2実験では，一定の教材を共通に用いて，実験群と統制群とに対し，前者と後者とで質問の順序性のみを変え，他の諸条件は慎重かつ厳密に同一条件となるように授業を行って，授業後の同一のテストの成績について両群を比較するという手続を通じ，混合法によるよりも，上記の仮説にしたがった方法による方が有意に効果的であることが証明されている。

五十嵐氏が長年にわたって疑問とし，それについて考究してきたもうひとつの問題は以下のようなものである。すなわち，これまで伝統的かつ多少とも無反省に実施されてきた英語の授業過程の構造は，十分に簡潔化すれば，S-R-E 構造と記述し得るようなものである。つまり，各教材単位の授業にあたって，まず，文型（S）が教えられ，つぎに音読（R）が行なわれ，最後に意味理解（E）の段階となる，という手続であった。五十嵐氏は，このような構造が伝統的なものとなった理由についても詳細に考察しているが，同時に，これに対する批判的論述を展開しており，その根拠として，広く G. Katona たちの見解，L.S. Vygotsky や N. Chomsky 等の言語心理学者の主張，あるいは Gestalt 心理学ならびに新行動主義心理学からの示唆などを援用し，掘り下げた考察を試みており，結果として，E-S-R 構造ともいうべきものが望ましいのではないかという仮説的結論に到達している。つまり五十嵐氏の論考内容を強いて要約すると，従来の方法は，主としてたんなる構造言語学の理論のみを金科玉条として準拠したことからの当然の結果であったと見られるのに対し，言語学のみならず，広く言語心理学ならびに学習心理学等の知見をも導入することによってはじめて理論的に導かれ得る仮説が上記のものとなる，ということであり，その経緯が深くつっこんで論じられている。

この E-S-R 仮説を検証する目的で行なわれたものが，第3実験，第4実験，および第5実験である。第3実験，第4実験はどちらも，実験群には E-S-R 構造の実験授業を，統制群には従来通りの S-R-E 構造の実験授業を適用して，授業後の共通のテストによって学習成果を比較した，いわゆる統制群法を用いている。両実験では，互いに，実験の時期も異なり，用いられた教材も異なり，したがって授業後に行なわれたテスト問題も異なり，対象とされた被験者群も異なり，しかも，第3実験での実験授業担当者は五十嵐氏自身であったのに，第4実験ではあえて当該中学校専任の英語教師に実験授業を依頼した，というように種々な条件において互いに異な

っていたにもかかわらず，実験の結果は，どちらの場合も，E-S-R 構造の方が，従来の S-E-R 構造よりも効果的であることが示された。また，第5実験は，五十嵐氏自身が実験授業の担当者として授業を行なった研究会の機会を利用して実施した，異なった地域における2つの実験からなっているが，この2つの実験でも，互いに，用いられた教材，被験者の学年水準，種々な環境条件等は異なっている。この実験では，1教材単位についての E-S-R 構造による授業終了後，被験者の生徒たちに対し，主として，興味，理解度，意欲の程度に関して，従来の授業と比較してどうであったかをきくようなアンケート調査を行なっているが，2つの実験結果を総合して集計した結果，中学のどの学年の被験者群の場合も，上記のどの側面に関する回答についても，圧倒的に E-S-R 構造の授業に対し，好意的な態度を示し，あるいは，望ましい反応をしていることが証明された。

以上のような理論的，実験的成果をふまえて，五十嵐氏は，さらに，少くとも英語の授業過程に関して，上記 E-S-R 構造を適用することと，適時適切に一斉授業と個別学習とグループ学習という3種の方法を適用すること，との両者のからみあわせによって，第1段階から第VI段階に至る6段階からなる授業過程の具体的な図式化を試みている。この図式を導くに至るさらなる理論的考察ならびに関係領域に関する知見の広さもさることながら，このような構想それ自体がきわめて独創的であり，しかも，これは教師の教育実践に対して具体的なよりどころを提供するものである。

その意味で，本論文における五十嵐氏の研究は，それが，たんに，氏が抱いてきた長年にわたる疑問を多くの困難を超えて実験的かつ実証的に解決したもの，というにとどまらず，本論文の結論に当る部分が，まさに，教育実践の世界に直接つながるものとなっている点でも，すぐれた教授学的研究の名に値するものである。

おそらく，もしもこの研究が，五十嵐氏自身の今後の努力によって，より広い言語学的研究および教育学的研究の規野の中に適切に位置づけられることができるならば，この研究の言語教育に関する教授学的研究としての価値はさらに高まることが期待されるであろう。

以上の理由によって，本研究は，学界ならびに教育実践の世界に対して教授学的研究としてすぐれた寄与のひとつに数えることができるものであり，氏は，教育学博士の学位を授与されるに十分な資格があるものと認める。